論　文

J. プリーストリーと T. H. ハクスリー
――18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人――

松本　哲人

1. 問題の所在

本稿の目的は、ヴィクトリア期を代表する科学者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー（Thomas Henry Huxley, 1825-1895）のジョゼフ・プリーストリー（Joseph Priestley, 1733-1804）に関する論文を分析することにある。ハクスリーのこの論文は、1874年8月2日、バーミンガム市に寄贈されたプリーストリーの銅像の除幕式典のときに行った記念講演にハクスリー自身が加筆、修正を施し出版したものである。Paradis（1978. 69-70）に従えば、ハクスリーの伝記的著作の中でも、比較的成功していると言われている論説において、ハクスリーがプリーストリーに肯定的であろうが、否定的であろうが何らかの興味を持っていなかったならばこのような講演をハクスリーが引き受けることはなかったであろう。本論では、イングランド啓蒙を代表する人物であったプリーストリーに対し、ハクスリーがどのような評価を下していたのかについて明らかにしたい。

プリーストリーは18世紀後期イングランド啓蒙を代表する人物であった。この時代のイングランド啓蒙の特徴は、宗教と科学の結合であり、フランス啓蒙や一般的に理解されている啓蒙像、つまり、科学の脱宗教化とは逆の方向性であった。18世紀後期イングランドの科学者たちにとって、科学を宗教とどのように結び付けていくかということが大きな課題であった。事実、松永（1996）が論じるように、イングランドにおいて科学が宗教から分離し、世俗化し始めるのは19世紀の後半になってからであり、啓蒙からおよそ1世紀後のことであった。その中心にはハクスリーがいた。

しかしながら、ハクスリーがプリーストリーの宗教的側面を肯定的に評価したとは言い難い。実際、ハクスリーはバーミンガムでの講演の1ヵ月前に友人宛の手紙において以下のように書いている。

> 「私はバーミンガムの招待を受けたことを有罪であると認める。…〔今回の講演は、私の心の中にある〕邪悪を少し換気する良い機会となるであろう。しかしながら、全く何も深く根付くことのなかった冷淡なかつてのユニテリアンを支持するような宗教的狂信者と私がなるだろうとは言えない。だが、私は近代思想の傾向に関する論説を手助けする上で彼らを良き釘にすることができると考えている。」(Huxley 1909. 442)

ハクスリーはユニテリアンを積極的に評価したわけではなかったにもかかわらず、ハクスリーは近代ユニテリアンの代表者であったプリーストリーに関する――簡単なものではあるが――モノグラフを講演し、出版した。ハクスリーはプリーストリーをとりわけ「近代思想の傾向」を理解する恰好の一例として取り上げていたが、実際にどのような側面を評価していたのか。ヴィクトリア朝期を代表する科学者ハクスリーが18世紀後期イングランド啓蒙のチャンピオンであるプリーストリーの遺産をどのように受け継いだのか。ハクスリーの思想は、ヴィクトリア朝期に18世紀後期にイングランドで生じた啓蒙がどの程度引き継がれ、宗教と科学の分離がどのようにしてなされたのかを考察する上で最良の材料を提供していると言えるのである。

そこで本稿では、まず予備的作業として18世紀後期イングランド啓蒙の特徴を主にプリーストリーの思想に即しながら論じる(第2節)。次に、ハクスリーのプリーストリー論の概略を論じ、その特徴を明らかとし(第3節)、そこから析出された自由の概念にとりわけ着目しハクスリーの思想的特徴をプリーストリーとの相違を念頭に置きつつ論じることとしたい(第4節)。最後に本論の結論を論じる(第5節)。

2. 18世紀後期イングランド啓蒙とは何か

18世紀後期イングランド啓蒙とは、アメリカ革命やフランス革命を支

持し、審査・自治体法の撤廃を要求するとともに、産業革命の土台を支え、イングランドの社会経済の改良を目指す運動であった。啓蒙とは、生越（2008, 129-131）が適切に要約しているように、「世俗世界における人間の進歩と改良」の思想であり、近代科学や新たな道徳的規律、経済的発展を目指した。そのような進歩や改良を目指すために、何らかの先進国をモデルケースとし、それにいかにして追いつき、乗り越えていくかが問題であったし、以前の科学的知識をより発展させ、科学そのものやその科学を利用し物質的に豊かになるためにはどうすればよいかということが啓蒙の実際的な問題として考えられる必要があった。[1]

このような啓蒙思想は、従来、宗教と科学の分離として理解されている。その典型はフランス啓蒙に見ることができる。ヴォルテールやディドロは人間の理性を尊重し、宗教的側面を科学から排除しようとした。しかしながら、18世紀後期イングランド啓蒙においてそのような側面は見られない。その啓蒙は、宗教と科学をできるかぎり密接に接合し、社会の改良を目指したのであった。例えば、Brooke（1991. 180 / 訳198-200）は、「啓蒙時代の特徴を科学的唯物論と宗教的価値観の対立図式とする構図は、あまり上手な素描ではないのである。フランスで真実らしかったことが必ずしもブリテンには当てはまらない」と指摘している。イングランドにおいては、ジョサイア・タッカーのような国教徒であろうが、プリーストリーのような非国教徒であろうが、宗教を科学から排除するのではなく、その両者を接合しようとしたのであった。[2]

また、実際にプリーストリーはイングランド社会のモデルを新たに建国されつつあったアメリカに見出した。[3] さらに、産業革命期において、新たな産業を支える技術を作り出すための科学的知識と神学は密接な関係をもっていた。プリーストリーはその関係をその時代において追求したもっとも著名かつ多産な科学者であった。Jones（2008. 15）は、産業革命期の啓蒙をとりわけ「産業啓蒙 Industrial Enlightenment」と呼び、プリーストリーは「神学における良き実践に対してだけでなく、科学における良き実践に対する表明に疲れ知らずであった」し、産業啓蒙期の「第一人者であり、卓越した人物」と評価を下した。このようにプリーストリーは18世紀後期イングランド啓蒙の代表的人物であった。

そのような活動は、とりわけ当時の聖書を合理的に解釈しようとした合理的非国教徒たち rational dissenters によって推進された。[4] その中でもユニテリアンは非常に大きな役割を担った。ユニテリアンは、プロテスタントの一派であり、聖書の徹底的に合理的な解釈を行おうとした。彼らは三位一体 Trinity を聖書のどこにも書いていないとしてその教義を認めなかった。三位一体とは、創造主としての父なる神、贖罪者キリストとして世に現れた子なる神、信仰経験に顕示された神聖なる神の聖霊が唯一なる神の三つのペルソナであるという説を指す。彼らは、神を唯一なりとし、キリストの神性を否定し、キリストを宗教的に偉大なメッセンジャーと見なす教義を信奉する。ユニテリアンという名称は、この三位一体説を拒否し、唯一体 Unity 説を信奉したことに由来している。後に見るように、彼らは国家と結びついたイングランド国教会制から排除されており、国家や教会に頼って生活する道を事実上絶たれていた。彼らは自分たちで生計を立てるために知識を追求し、それを応用することで自分たちの生活手段を手に入れていたのであった。その典型的な例の一つはプリーストリーにおいて見られる。彼の二酸化炭素の発見は、それを応用した炭酸水の開発によって、彼に非常に大きな富をもたらした。彼らにとって啓蒙は自らの生活を維持するためにも必要な活動でもあった。

3. 哲学と神学

プリーストリーが科学を推進した目的は、彼の啓蒙がそうであったように、宗教と科学の密接な関係を描き出すことにあった。事実、彼は科学の目的を神の摂理の解明と考えていた。つまり、地球の誕生と同時に神が世界および地上に埋め込んだシステムを発見することが科学のもっとも根本的な目的と見なしたのであった。しかしながら、ハクスリーのプリーストリー評価は異なっていた。ハクスリーは「ユニテリアン神学者プリーストリーではなく、思想と行動における合理的な自由の恐れなき防衛者、つまり哲学的思想家プリーストリーに対する賛意を示す（Huxley 1874. 2-3）」ために今回の記念講演を行うと明示している。また、別のところでも、以下のように論じている。

「プリーストリーの生涯を眺めてみると、とにかく彼は、知識を増進することと、知性の進歩の原因であり同時に結果でもある思想の自由を促進することに、もっとも高い価値を認めていたことは明らかである。」(Huxley 1880. 134-135 / 訳65)

事実、プリーストリーは知識の増進により進歩が導かれ、人々の生活を改善することができると信じていた。彼は次のように書いている。

「知識は、ベーコン卿が観察したように、力であるので、人間の能力は、実際に、〔その力を用いることによって〕大きくなるであろう。物質と法則を含む自然を、今以上に、私たちの指揮下に置くことができるだろう。〔そして、〕人は、現世での自分たちの状況をより容易かつ快適にするだろう。」(Priestley 1768［1771］. 9)

ハクスリーは上述のプリーストリーの一節に言及していないけれども、プリーストリーの考えを良く知っていたし、非常に高く評価していた。ハクスリーの言葉を単純に信じれば、ハクスリーはプリーストリーの政府論に極めて高い評価を与え、宗教的な議論には着目しなかったと考えることができる。

しかしながら、実際には、そのような単純な話ではなかった。ハクスリーはプリーストリーの哲学に非常に大きな関心を払っていたし、哲学と政治の関係性に着目していた。事実、プリーストリーの哲学は彼の神学と密接な関係を持っていたし、ハクスリーは宗教的側面を無視したわけではなかった。Stanley (2015. 169) は、この講演においてハクスリーは「プリーストリーを科学と宗教の両方における自由のアイコンとして用いた」と見なしている。

実際、ハクスリーは、プリーストリーの哲学的考察を以下のように非常に高く評価している。

「プリーストリーの『物質と精神に関する論考』や『哲学的必然論例証』は、英語で存在し、今もなお読む価値のある物質論と必然論のもっとも強力で、明確で、断固とした説明の中の一つである (Huxley 1880. 22)。」

プリーストリーは、これらの書において、自由と必然という哲学的な対立軸のもと、自由を否定し、必然を受け入れた。Harris（2005. 168）も指摘している様に、プリーストリーは必然論を原因と結果の考察によって引き出すことができると信じていた。プリーストリーは以下のように書いている。

> 「すべての自由、より厳密に言えば、力――私は〔それを〕人がもっていないと言っているが――は、（精神状態や物の見方を含んでいる）すべての以前の状況が正確に同じであったときに、さまざまなことをするそれである。私が論じていることは、同じ精神状態や同じ物の見方を持った彼はしばしば自発的に同じ選択をし、同じ決断を下すだろうということである。例えば、もし私が今日、何らかの特定の選択を行えば、その選択に関する私の精神状態に何ら変化がないとすれば、私は昨日も同じようにしたであろうし、明日も同様にするであろう。
>
> 言い換えれば、精神の他の力や自然の構造物における他のあらゆるものと同じように、その意思に関する何らかの固定化された自然の法則があると私は主張する。そして、結果的に、何らかの現実のないし明らかな原因なしに、それと無関係に、つまり、何らかの選択の動機なしに、それは何ら決定されないのであり、動機は私たちに何らかの明確かつ不変の方法で影響を与えるのである。その結果、あらゆる決定ないし選択は、それに先立つものによって永続的に規制され、決定されるのである。そして、それに現わされた動機に照らされた精神のこの永続的な決定が、その哲学的決定論によって私が意味しているすべてである。これが事実であると認められれば、適切な原因と結果において、自然世界におけるのと同じ知的世界においても、過去、現在、将来のすべての事物の間での必然的な関連性が存在するであろう。その結果、人類の大部分がそれを理解することができる、もしくはそれによって動揺させられることがほとんどなかったとしても、規定の自然法則にしたがって、出来事は、それが過去にそうであった、ないし現在そうあるべきものと別の物であることはできないだろうし、それゆえ、過去、現在、未来のすべての事物は、正確に自然の創造主が実際にそれらに対してそうあるべきと意図し、準備したものなのである。」（Priestley 1777［1782］. 461-462）

世界のある現象には必ず因果関係が存在し、人間のある行為は動機を認知できる理性を持つ精神によって導かれるとプリーストリーは考えていたの

であった。プリーストリーの必然論は、神の摂理の解明という彼の科学的探究とこのような点において密接な関係を持っていた。

また、ハクスリーが的確に表現している様に、「彼〔プリーストリー〕は肉体から分離した魂の存在を否定した。そして、自然的結果として、彼は人の自然的不死を否定した（Huxley 1880. 22）」のであった。魂と肉体の分離論を取らず、すべてを肉体に還元させ、霊的なものを除外したプリーストリーの物質論は、彼の必然論と結びついて科学の探求に対する一つの重要な視点となっている。つまり、霊的存在を認めないがゆえに、プリーストリーの科学的探究は、現実世界における観察と経験によって可能となった。[5]

Stanley（2015. 215）に従えば、ハクスリーは18世紀に展開された必然論や自由意思といった哲学的な問題や魂の存在に関する神学的議論を「本質的にはヴィクトリア時代のそれと同じもの」として議論していた。とりわけ、ハクスリーはそのような議論が「下品なラベルでもって汚名を着せられてきた」として擁護したのであった。ハクスリーは以下のように論じている。

> 「もしある人が物質主義者であれば、もし彼の主張はその反対であるにもかかわらず、彼はそう〔物質主義者〕であるし、そうであるに違いないと良き権威が言えば、もし彼が人の自然的不死を信じる良き理由を自分自身に見出すことができないとわかれば、立派な人々は、実際のないし潜在的な快楽主義者と同じように彼を一時的な現金保管箱を持つ危険な隣人と見るのである。表面上の見かけにおいて有徳であればあるほど、秘密の『重大な個人的罪』をなるほどたっぷり持つことになる。」（Huxley 1874. 23）

それにもかかわらず、ハクスリーは、「プリーストリーの〔神学に基づいた〕哲学的視点を防衛も攻撃もしない（Huxley 1874. 26）」と評価を保留している。なぜなら、ハクスリー自身が表明しているように、彼がプリーストリーの視点に興味を払った一番の理由は、プリーストリーの考えの表明を18世紀イングランドの「監督的な当局episcopal authority（Huxley 1874. 26）」であるイングランド国教会に対する挑戦と見なしていたからであった。このようなプリーストリーの挑戦をハクスリーは積極的に評価し、そ

れがプリーストリーの政治思想によって支えられているとハクスリーは見なした。ハクスリーのプリーストリーに対する、「思想と行動における合理的な自由の恐れなき防衛者、つまり哲学的思想家プリーストリー（Huxley 1874. 2-3）」としての評価はこのような側面から現れるのである。

4. 政府と自由

ハクスリーはプリーストリーの政治思想の基礎をロックに見出した。「『政府の目的は人類の善である』というロックの金言は…プリーストリーによって拡大された（Huxley 1880. 27）」とハクスリーは見なしている。これはプリーストリー自身も自認していたことであり、適切な見解である。[6]「あらゆる国家の構成員、すなわち、大多数の善や幸福は、偉大な基準であり、それによりその国家に関するあらゆるものが最終的には決定されなければならない（Priestley 1768［1771］. 13）」とプリーストリーが論じたとき、彼がロックの金言を拡大していることは明らかである。その善を追求するためには、個々人の活動の自由が認められなければならない。

しかしながら、ハクスリーは、講演の数年前にあたる1871年の著作において、ロックの統治論を評価しつつも、必ずしも納得しなかった。政府の目的についてハクスリーはロック『統治二論』を批判的に考察している。[7]ロックは、「統治の目的は人類の善」であると規定し、以下のように論じる。

> 「そうであるとすれば、人民が専制の際限のない意志にさらされることと、支配者が、その権力を濫用するようになり、それを人民の保全にではなく破壊に用いる際には時として抵抗を受ける場合とでは、どちらが人類にとって最善であろうか。」（Locke 1691. 474 / 訳375）

このようにロックは、政府の目的は、専制的な統治者を排除し、専制的な権力が人々の自由を奪い、最終的には人々の生活そのものを破壊する可能性を示唆することにその力点が置かれていた。その意味において、ロックが「統治の目的は人類の善である」と論じたとき、その言葉は普遍的な原

理として考えられていた。それに対し、ハクスリーはロックを批判し、「人類の善」は不変ではないので、国家の役割は時代に応じて変更される可能性があると考えていた。[8] ハクスリーはロックを評価しながら、以下のように論じる。

> 「ロックはそのような〔「政府の機能を定義するような」〕条文を――私が知っている――もっとも高貴であると同時にもっとも簡潔な政府の目的に関する記述で私たちに与えている。つまり、『統治の目的は人類の善である。』
> だが、人類の善は、彼ら〔人々〕の能力や文明状態がどのようなものであっても、すべての人々にとって完全で固定化されるものではない。」（Huxley 1871. 278）

ハクスリーにとって、人々の善なるものは、時代やその時代を生きている人々の考えによって変化するものであると考えていた。プリーストリーが国家の少なくとも大多数の構成員によって善や幸福が追求されなければならないと論じたとき、時代や状況に関係なく一元的な善や幸福を考えていたとはその統治論の民主的な性格から見ても難しい。[9] その意味において、ハクスリーは、ロックを継承し、統治の目的は普遍的な善ではなく、時代に適合した形での善と考えていたプリーストリーの統治論を正確に理解していたと見ることは正しい。

しかしながら、人類の善や幸福について、ハクスリーとプリーストリーの見解は異なっていた。ハクスリーは善と幸福を同一視し、現世における目的と見なしていた。ハクスリーは以下のように論じている。

> 「人類の善はあらゆる人々によって――彼〔あらゆる人々〕が同胞の幸福を減少させることなく享受することができる――すべての幸福の獲得を意味していると私は理解している。
> もし私たちがこの定義の下でどのような種類の幸福が生じるかを考察すれば、私たちはその幸福が、安全ないし平和の感覚、商業によって獲得される富ないし商品、芸術――それは建築、彫刻、絵画、音楽、文学のどれかであろう――、知識すなわち科学、最後は同情ないし友情から引き出されると理解するのである。」（Huxley 1871. 281）

ハクスリーにとって人類の善とは現世において獲得される幸福を基準とし、他者の幸福を減らすことなく自己の満足を最大化することであった。また、彼の幸福理解を見れば明らかなように、彼は現世における幸福だけを問題としている。したがって、ハクスリーにとって、幸福とは極めて現世的な意味を持ち、来世を含む宗教的な意味を持ち合わせておらず、幸福となることが現世における目的となっていた。

他方、プリーストリーは幸福な状態を現世だけでなく宗教的な意味においても用いていた。彼にとって、幸福な状態とは最終的には来世における人格の完成を意味しており、現世において幸福な状態が完結するものではなかった。プリーストリーは来世と現世における幸福を明確に区分していたけれども、現世での幸福が来世での幸福を保障するための手段となると考えていた（松本 2009. 13-15 参照）。

このような彼らの幸福に対する手段と目的の立ち位置の差異は、彼らのおかれていた状況の違いでもあった。先に論じたように、プリーストリーは非国教徒であり、審査・自治体法の下、自由は制限されていた。これらの法律の制定、施行の目的は、ローマ・カトリック教徒と反三位一体論者の排除であった（Dickinson 1977, 84/ 訳 82 参照）。審査法 Test Act とは、1672 年、チャールズ２世が出した信仰自由宣言などのカトリック宥和政策に議会が反発して制定、1673 年に施行された。それは、三位一体信仰を宣言するよう強制的な審査を課すことによって、イングランド国教徒以外の人物が国家機関の公職に就くことを禁止した法律であり、国教徒による支配体制の強化に役立った。自治体法 Corporation Act とは、1661 年に施行され、国教会以外の人物が地方自治体の官職に就くことを禁止した法律であり、非国教徒の政治的影響力を排除する役割を持っていた。これらの法律は、ともに 1828 年まで維持された。また、審査法はオックスフォードやケンブリッジといった国立大学への非国教徒の入学を禁じた。[10] プリーストリーは、そのような抑圧的な制度を撤廃する必要があると考えていた。ハクスリー自身も以下のように論じている。

> 「審査・自治体法の影響を受けた非国教徒として、そして寛容法の便益から排除されたユニテリアンとして、プリーストリーが教会制度について非常

に明白な意見を持っているとわかっても驚くことではない。」(Huxley 1880. 28-29)

しかしながら、プリーストリーは、審査・自治体法の即時撤廃は要求したが、国家を支配するイングランド国教会の即時撤廃を要求したわけではなかった。ハクスリーはそのようなプリーストリーの態度に驚いた。

「唯一の驚きは、これらの〔教会制度に関するプリーストリーの〕意見が…非常に穏健であったということである。」(Huxley 1880. 29)

事実、ハクスリーも引用しているようにプリーストリーは以下のように論じている。

「教会当局は社会の揺籃状態においては必要であるだろうし、同様の理由から、社会が不完全である限りある程度必要であり続けるだろう。それゆえ、市民政府が完成にほぼ達するまで、完全に捨て去られることはないだろう。したがって、もし私がヨーロッパのすべての教会支配の即時解散に賛成するかどうか尋ねられれば、私は否と答えるだろう…経験をまず改革から作らせよう、もしくは同じことであるが、現在よりもよりよい制度を作らせよう。そして、それらによって多くの本質的な部分を改良させよう。そして、善がそれら〔教会支配〕から作り上げられることはできないという経験によって、それらのことが理解されるまで、〔教会支配を〕完全に放棄しないようにしよう。」(Priestley 1768 [1771]. 94-95)

ハクスリーにとって教会制度は現世での幸福の達成にとって障害にすぎなかった。それゆえ、ハクスリーは教会支配に対して懐疑的であったし、プリーストリーが教会制度の即時撤廃を求めなかったことを不思議に感じたのであった。

このようなハクスリーの態度はスコットランド啓蒙に対しても向けられていた。ハクスリーはとりわけ現世での幸福を実現するための方法としてアダム・スミスによって書かれた『国富論』の中で論じられる商業に対する政府規制の撤廃への言及を高く評価している。

「当時、教会によって非国教徒に対して向けられた銃が発射されていた。その法律は悪と残忍の巣窟であった。アダム・スミスはほとんどの人が関心を向けなかったが新たな予言者であった。商業は政府の側でばかばかしい障害によって妨害され、ましてや理性に反した助けによって破壊されたのであった（Huxley 1880. 32）。」

彼が考える幸福の一要素である「商業によって獲得される富ないし商品」を獲得するために、彼自身が明示的に論じているわけではないが、事実上、市場の働きを重視し、政府の市場への干渉は「理性に反し」ているものとして否定された。ハクスリーにとって、イングランドにおける非国教徒の迫害とスコットランドにおける政府による経済活動の制限は、個々人の自由を抑圧し、人々の幸福の実現を阻害するものにすぎなかった。ハクスリーが啓蒙を高く評価するのはこのような側面からであり、プリーストリーをハクスリーが高く評価したのはこのような非国教徒の制限に対するプリーストリーの態度にあり、政府による個々人への自由の干渉がいかに人々を苦しめ、現世での幸福の実現から遠ざけられているかを暴くためであったのであった。

5. おわりに

本論は、ハクスリーのプリーストリー論から、ハクスリーがどのようにプリーストリーやイングランド啓蒙を評価していたのかを明らかにすることが目的であった。ハクスリーは、当時のヴィクトリア朝における政府の規制に対する反論をプリーストリーの議論から引き出そうとした。イングランド啓蒙は、プリーストリーがその典型であるように、宗教と科学の結合を目指した。宗教が国家により管理、統制されている状況では、科学研究の進展は見込めない。よって、政府の様々な規制を取り払おうとした。実際、18世紀の様々な非国教徒に対する規制は、彼らの自由を奪っていた。ハクスリーはプリーストリーのそのような考え方に共感し、同じように彼が生きた時代に適用しようとした。ハクスリーにとって、個々人に自由が担保されることは、社会生活を営むだけでなく、科学研究において

も重要な側面であったに違いない。彼がプリーストリーをはじめとする18世紀後期イングランドから学んだことは彼にとって極めて重要な示唆を与えるだけでなく、彼の思想の根本的な部分を支えていた一つであったということができるだろう。

注

1 当然のことながら、啓蒙思想は漸進的改良や輝かしい未来を描くためにいくらか楽観的なものであり、アドルノとホルクハイマーが描いたように啓蒙が悲劇を生み出した実例も存在する。しかしながら、既得権益が蔓延する社会において、その既得権益を打破するために啓蒙思想は必要であったし、現在においてもその精神は必要であるだろう。

2 Waterman（2004, ch.2）および松本（2015b）を参照。

3 アメリカ革命後のプリーストリーのアメリカの見解については、Bonwick（1977, 183-184）を参照。また、革命以後のアメリカの経済的条件（自由な取引や移動等など）に関しては、Priestley（1798）を参照。

4 非国教徒の定義や彼らの宗教的義務等については、プリーストリーのもっとも初期の著作において明確に論じられており、「合理的非国教徒 rational dissenters」という表現もその著作において見ることができる。Priestley（1769）を参照。また、川分（1993）にしたがえば、合理的非国教徒は18世紀後半から19世紀前半のイングランドの政治に大きな影響を与えた。

5 実際、プリーストリーは、科学研究における仮説の形成に懐疑的であり、観察と経験に非常に重きを置いていた。彼は以下のように論じている。「ア・プリオリな議論に基づいて作り上げられた仮説は、もっとも耐えられるものではない。ここに観察と経験だけが安全な導きとなる。」（Priestley 1803, 35）

6 これに加え、プリーストリーはロックの抵抗権の議論を重視した。その背景にはアメリカ植民地の独立問題ならびにフランス革命があったことは言うまでもない。事実、ロックの政府論においても抵抗権の問題は極めて重要であった。愛敬（2004）もまた、ロックの抵抗権と18世紀イングランドにおけるその受容に関して以下のように論じている。「ロックの『政府解体論』の射程として私が評価したいのは、既存の統治構造の道徳的基礎を根底から問い直すこの論理である。18世紀のウイッグが受容することのできなかったロックのラディカルな含意は、具体的には彼の抵抗権論（＝政府解体論）に示されていたが、その本質は彼の政治理論の問題設定そのものにあったというべきである。そして、『自然的自由にある自律的個人が、何らかの権

力に服従すべきであるとすれば、その正当な政治権力とはいかなるものか』というロックの問題設定のラディカルな含意が、プライスやペインといった18世紀後半の急進派へと継承されていくのであり、彼らのロック受容は、『名誉革命体制』期のイデオロギーたるロック思想の『曲解』によるものではなくて、まさにロック政治思想の『正当な継承』であったと評価できるように思われる。」このような理解に則したとき、ハクスリーがロックの抵抗権を中心的な概念と見なさなかったことはひとつの象徴的な事象である。つまり、ハクスリーがロックを論じるとき、彼は歴史状況が安定的であり抵抗権を議論する意義を見出さなかったのか、そもそもロックのこのような急進的側面を支持しなかったために抵抗権を議論しなかったのかが一つの大きな問題となるように思われる。

7 ハクスリーは、1890年に『自然的権利と政治的権利』において、ルソーやケネーを念頭に「自然法から引き出された自然権は単に事実を述べる方法である（Huxley 1890. 349）」から、「ア・プリオリな政治的思索であり有害な方法（Huxley 1890. 337）」であると批判している（Fujita 2007. 143も参照）。しかし、ロックに対する明示的な批判は存在しない。

8 このようなハクスリーの考えは彼の個人主義的教育論への批判の論理としても利用される。藤田（2004. 49-50）参照。

9 この点は、トマス・ペインの政治思想と極めて類似している。ペインもまた、それぞれの時代においてそれぞれの主権者による意思決定が重要であると考えていた。「あらゆる時代およびあらゆる世代は、それ以前のあらゆる世代と同様、どのような場合にも、その思う通りにふるまう自由がなければならない。墓の中に入っていながら、なおかつこの世を統治しようなどという虚栄心ないし思い上がりは、数ある専制の中でも、それこそ笑うべき傲慢不遜な専制というべきである。」（Paine 1791. 278 / 訳24）　しかしながら、プリーストリーとペインには神学的な相違が見られることに注意が必要であるように思われる。（松本 2015a参照）

10 正確には、イングランド国教会の39か条（聖公会大綱）への署名が義務付けられていたために、その39か条への宣誓拒否者は大学への道が閉ざされることとなる。

参考文献

Bonwick, Colin 1977. *English Radicals and the American Revolution*, Chapel Hill: The University of North Caroline Press.

Brooke, John H. 1991. *Science and Religion: Some Historical Perspectives*, Cambridge, Cambridge University Press. 田中靖夫訳『科学と宗教：合理的自然観のパラ

ドクス』工作舎、2005年。
Dickinson, H. T. 1977. *Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain*, Methuen. 田中秀夫監訳、中澤信彦他訳『自由と所有 ――英国の自由な国制はいかにして創出されたか』ナカニシヤ出版 、2006年。
Fujita, Yuh 2007. "Land, Nature and the State: Wallace, Spencer and Huxley on the Land Question,"『ヨーロッパ研究』6: 135-152.
Harris, James A. 2005. *Of Liberty and Necessity: The free Will Debate in Eighteenth-Century British Philosophy*, Oxford: Clarendon Press.
Huxley, Leonard 1909. *Life and Letters of Thomas Henry Huxley*, in Two Volumes, vol. 1, New York; London: D. Appleton and Company.
Huxley, Thomas H. 1871. "Administrative Nihilism," in *Collected Essays of T. H. Huxley*, Vol. 1, [London: Macmillan and Co, 1893,] Bristol: Thoemmes Press, 2001.
――― 1874. "Joseph Priestley," in *Ibid.*, Vol. 3.
――― 1880. "Science and Culture," in *Ibid.*, Vol. 3. 佐伯正一・栗田修訳『自由教育・科学教育』明治図書出版、1971年。
――― 1890. "Natural Right and political Rights" in *Ibid.*, Vol. 1.
Locke, John 1691. *Two Treatises of Government*, in *The Works of John Locke in Nine Volumes*, (London: Rivington, 1824, 12th ed.). Vol. 4. 2016/6/20. http://oll.libertyfund.org/titles/763　加藤節訳『統治二論』岩波書店、2007年。
Paine, Thomas 1791. *Rights on Man*, in *The Writings of Thomas Paine*, Collected and Edited by Moncure Daniel Conway, New York: G. P. Putnam's Sons, 1894. Vol. 2. 西川正身訳『人間の権利』岩波文庫、1971年。
Paradis, James G. 1978. *T. H. Huxley: Man's Place in Nature*, Lincoln; London: University of Nebraska Press.
Priestley, Joseph 1768 [1771]. *An Essay on the First Principles of Government*, in *The Theological and Miscellaneous Works of Joseph Priestley*, ed. with notes by Rutt, J. T., Bristol: Thoemmes Press, 1999, vol. 22.
――― 1769. *A View of the Principles and Conduct of the Protestant Dissenters*, in *Works*, vol. 22.
――― 1777 [1782]. *The Doctrine of philosophical Necessity Illustrated*, in Works, vol. 3.
――― 1798 [1801]. "Maxim of Political Arithmetic, Applied to the Case of the United States of America", in *Letters to The Inhabitants of Northumberland and Its Neighbourhood*, 2nd ed., in *Works*, vol. 25.
――― 1803. *Lectures on History, and General Policy*, in *Works*, vol. 24.
Stanley, Matthew 2015. *Huxley's Church & Maxwell's demon: From Theistic Science to*

Naturalistic Science, Chicago and London: The University of Chicago Press.
Waterman, Anthony. M. C. 2004. *Political Economy and Christian Theology since the Enlightenment: Essays in Intellectual History*, New York: Palgrave Macmillan.

生越利昭 2008.「勤労の育成――ロックからハチスンまで」田中秀夫編著『啓蒙のエピステーメーと経済学の生誕』京都大学学術出版会。
川分圭子 1993.「十八-十九世紀転換期のウィッグと非国教徒――ホランド・ハウスの人々」『史林』76 (3): 1-35。
藤田祐 2004.「自然と人為の対立とその政治的含意――T. H. ハクスリーの進化社会理論」『イギリス哲学研究』27: 39-54。
松永俊男 1996.『ダーウィンの時代――科学と宗教』名古屋大学出版会。
松本哲人 2009.「神学的功利主義の二類型――W. ペイリーと J. プリーストリー」『マルサス学会年報』18: 1-30。
――― 2015a.「プリーストリーのペイン批判――18 世紀後期イングランドにおけるユニテリアニズムと理神論」『ピューリタニズム研究』9: 40-50。
――― 2015b.「ジョサイア・タッカー――宗教・経済・政治」佐藤光・中澤信彦編『保守的自由主義の可能性』ナカニシヤ出版。

――徳島文理大学短期大学部講師

Summary

Intellectuals of the English Enlightenment and the Victorian Age: Joseph Priestley and Thomas H. Huxley

Akihito Matsumoto

This paper elucidates "Joseph Priestley," an essay by T. H. Huxley, one of the most eminent scientists in the Victorian age. Priestley was a typical thinker of the late 18th-century English Enlightenment, which was distinct from the French one. In other words, Priestley did not attempt to separate science from religion; instead, he wished to harmonize the two.

Huxley believed the state-church system to be a factor that limited scientific research, and he therefore asked to be liberated from its authority. Priestley had also demanded the same in 18th-century England. As a Unitarian and a rational dissenter, Priestley wanted to interpret the Bible rationally. To do so, he did not want to be restricted by an authority that did not permit individuals to interpret the Bible.

Huxley identified his own assertion with Priestley's thought, although he did not completely accept Priestley's theological perspectives. However, he recognized Priestley's liberal attitudes toward politics and endeavored to adopt them in the Victorian age.